

淨土

1982-11

昭和十年五月二十日
昭和二十四年四月二十八日
昭和五十七年十月二十五日印刷
(第三種郵便物)
運輸省
第四十八卷



「光 寿 無 量」

なか むら こう りゅう
中 村 康 隆
大本山増上寺法主



十一月号



譬えば恒沙のごとくなる諸仏世界、
また不可計無数刹土ありて光明こと
ごとく照らしてこの諸の国に徧（あ
まね）からん。

——『無量寿経』歎仏頌

目次

◇特別対談◇

—人生を語る—

仏道と芸道	中村康隆
	中村梅之助……(2)
<司会>	宮林昭彦

特別寄稿

樟落葉	一田善寿……(10)
-----	------------

(一) (口) (法) (話)

我は烏帽子もきぬ法然房也	村瀬秀雄……(14)
--------------	------------

法話

お釈迦さまと阿弥陀さま	魚尾晃久……(16)
-------------	------------

<連載>

後鳥羽院と御製『無常講式』(三)	宝田正道……(19)
------------------	------------

仏教英語にたずさわって(下)	原口正弘……(24)
----------------	------------

詩、二題	吉水正三……(30)
------	------------

念仏信仰の日々

——なつかしさのわく暮らし——	関谷喜与嗣……(32)
-----------------	-------------

浄土句集	一田牛畝選……(28)
------	-------------

<表紙裏・染筆> 光寿無量	中村康隆
---------------	------

念仏ひじり三国志 (102) ——法然をめぐる人々	寺内大吉……(37)
---------------------------	------------

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

特 別 対 談

|| 人生を語る ||

仏 道 と 芸 道

大本山増上寺法主

中 村 康 隆 大僧上

前 進 座

中 村 梅 之 助 丈

〈司会〉

宮 林 昭 彦

(編集人・大正大学教授)

司 会

本日はご多忙の折から貴重なお時間を拝借してまことに申し訳ありません。ことにご法主には、ご入山早々の慌しい時に、また梅之助さんには、前進座劇場落慶のご興行を間近に控えての時に、本当にありがとうございます。

さて本年はご承知のように、法然上人ご生誕八百

五十年の記念すべき佳辰でありまして、とくに梅之助さん以下前進座のみなさまにも『法然』劇のすばらしいお芝居をご公演していただいているわけです。京都公演、続いての東京公演と、私共も大変感動して拝見させていただきました。ことに東京公演の終り近く、九月二十一日には、前進座の大黒柱

でもあり、また梅之助さんに、ご父君であられました中村翫右衛門さんが八十一歳の生涯を閉じられたことでもあり、みなさまの『法然』劇のお芝居とあわせて、そのお心持ちをおはかりして、いたく感動いたしました次第です。翫右衛門丈のご冥福をまず心よりお祈りいたします。



—八十五世増上寺法主

中村康隆大僧上台下——

法主

ところで本席は「人生を語る——」というようにことで、ご法主にとりましては父でもあり、また寺にお生まれになって仏道の師僧でもあられた中村弁康上人のこと、そしてまた梅之助さんにとりましても芸道の師でもあり、もちろん父親でもあられた翫右衛門さんのことなどを想いいたきながら、「仏道と芸道」というような内容でお話し願いたいのです。

親父のことなんですが、お芝居の方ですと五歳ぐらいから舞台に出て、だんだんと馴じんでしまっただけで、出るのが楽しくなると思うんですけど、仏教の方でも小さい頃から馴じんで行くことは大変に意味のあることなんです。先日御入山式の際に、まだ三歳、四歳なんですが、二人の孫に衣を着けて一緒に写真なんか撮ったんです。

私自身も五歳ぐらいから、親父の命令で、毎朝の勤行と漢文や仏典の勉強をさせられたんですね。おばあさんが可哀相だというので、一緒について覚えさせてくれたのをなつかしく思い出します。「門前の小僧習わぬ経を読む」ということで、確かに小さ

い時からの素養というか、しつけということは大切ですね。

これともう一つは、今でいう中学から高校の頃の時代ですが、私もまたお坊さん、坊主になるのが嫌になってしまったんですね。まあ、父が大変に厳しかったんですね。もちろん私が悪かったんでしょうが、ある時は廊下からけとばされたことなどもありました。ともかくそんな頃、祖母が信州の唐沢山阿弥陀寺で一週間行われた、あの光明会を開かれた念仏の聖者山崎弁栄上人の別時念仏会に連れて行ってくれたんですね。ともかく、その弁栄上人のお話と眼差しの中に抱きかかえてくれるような気持ちを感じえたんですね。それで一週間、一生懸命にお念仏をしました。弁栄上人のお人となり、本当に心がひかれてしまいました。この方の教えに従ってお念仏を生徒勤めて行こう、そういう決心をその時にしたんですね。まあそれが、私にとっての一つの宗教的な回心の時になったんです。

小さい時に教えられたこと、厳格な扱いかいとかいろいろなこと、それが今になってみるとよく身に付

いていたというか、自然のうちに覚えてしまっていたんですね。こういうことは芸の世界でも同じだろうと思うんですね。小さい頃から一つ一つの修行、そしてまたある時に感ずる芸への回心というようなこと、それがその道を一步一步先へと進めて行く原動力だと思んですが。ドイツの学者は、螺旋階段を登るようなものだといっています……。

梅之助文 こんなお話をじかにおうかがいできるなんてまことにありがたいことだと思えます。わが家には、「教えない教え」という家訓がございます。まったく教えてくれない、ということですが。ただ私の祖父、中村梅雀といったんですが、門閥を嫌って浅草の柳盛座という小さい劇団の座頭をしておりました、子供たちだけはちゃんとした修行しなければいけないということで、二人の子を歌舞伎の先代歌右衛門さんのところへ修行に出したわけです。しかしまあ、檜舞台に対して緞帳芝居などといわれまして、大変な苦勞もしたようです。父畠右衛門が十八歳の時に、祖父梅雀が亡くなりましたが、その時が父にとりましては芸の方の回心の時代であったよう



—中村梅之助丈—

です。梅雀の死を契機にして、私の父は発願してそれこそ真剣に舞台に没頭したようです。ところがやはり伝統的に反骨精神が旺盛でしたから、また事実門閥がないとなかなか出世できないという世界でしたから、その時代の社会的な影響も受けまして、昭和六年に前進座というものを創ったわけです。

やはり私は男一人でもありましたので、父は役者にしようと思ったんでしょうね。今考えると僕は舞台が好きだった方でしょうか。月刊『前進座』とい

中村梅之助（なかむら うめのすけ）

昭和五年、東京生れ。先頃逝去された、前進座の大看板中村畝右衛門丈の長男として、すでに子役の時代から舞台に立って活躍。昭和四十五年より、NET（現テレビ朝日）系列で放映がはじまった「遠山の金さん捕物帳」で、一躍お茶の間の人気者となった。その後も、「伝七捕物帳」（NTV）、NHK大河ドラマ「花神」、「達磨大助捕物帳」（テレビ朝日）、「そば屋梅吉捕物帳」（テレビ東京）とたて続けに主演し、現在でもNHK「峠の群像」に近松門左衛門役で活躍中。舞台の方は、「勸進帳」、「鳴神」等、重厚の立役として名演している。

う雑誌に、十三歳の時に書いたものがあるんですが、それによると「楽屋口から入ると絵具のにかわの臭いやいろいろな臭い、それからシーンとした空間、そして道具を通して表から聞えてくる舞台の声、それを聞きながらそおーと舞台裏を降りるのが好きだ」なんていうことを書いているんですね。その頃なんです、舞台から引込んでくると、「オイ、ちょっと来い、ちょっと来い」と呼ばれるんですね。それで行くと、ポカンと火の出るようなやつが

くるんですね。「大根やめろ」というんですね。二十五日興行のうち、二十三日はたたかれていましたね。もう役者になるのは嫌だと、何回となしに思いましたが、これだけはやっておこうというので、毎日、台本を読んだのです。

結局、それから戦争がはじまってしまいましたので、私も疎開をした一人なんです。その時に父が私を呼びまして、「これは誰にも話しちゃいけない」ということで、なぜ戦争が起ったかを二時間に渡って話してくれまして、スタニスラフスキーというソビエトの演出家の本を読むようにと渡されたんですね。ともかく負けまいとする心というんですか、そんなものを疎開っ子として学びまして、終戦の年、十五歳で前進座に入ったわけです。それからもう教えてくれないなあ。ただいろいろと怒られたことは多いですが、父は、ことごと知らないうちどこかで見ていてくれました。そして「教えない教え」ということですが、あとで考えますと、きちんとすること、ものごとに対して普段からおろそかにしないこと、失敗してもいいからあと仕事を大切に

にすること、そういったことを強く教えてくれたようですね。とにかく踊りなどにしてもそうですが、小さい頃から自然に身についてきたことというのが重要なことですね。それだけにやろうと思うという時、いわば回心というように思っています。それまでは親の責任というようにも思っています。も今、自分の子供もそのように育てようとして来たんですが。

法主

仏教では「薰習」という言葉があるんですが、自然に身について来るもの、そういうものがやはり将来花を開くんだということで大切な教えとしています。

いろいろと考えてみますと、親父とか祖母の気持ちとか生活態度といったものが、自然に自分にまっわりついているんですね。専修念仏の教えもそうですが、「南無阿弥陀仏」とお念仏を申す中におのづから育てられて行くんですね。

私の父は、戦前、戦中と増上寺の仕事をしながら、また『浄土』誌などの発行に力を尽してきましたが、『浄土』についても、当時、真野正順

先生や佐藤賢順先生とはじめまして、戦争中は一人で編集して、校正をやったり、発送まで一人でしていたんです。そんな時、私が、「親父さん手伝うよ」といいますと、「いいよ、お前にはお前のやることがあるだろう」といまして、自分一人でやっていたんです。本当に見ていられない気持ちもしたんですが、親父がそれをやり通したということは、どんなに苦しい中でもやり通すという気持ちだけは、人間持たなければいけないあ、ということを教えら



— 司会・宮林昭彦編集人 —

れた思いでした。

司会

確かに、私共は日々の生活においても家庭の中で小さい頃から育まれてきたことの影響は大きいのですが、その意味ではご法主にしても、梅之助さんにしても、お父上であるということももう一つ、仏道、芸道の上でも師匠であったわけですが、変ないい方をすれば、「父たることをやめて師匠となる」というようなこともあったわけでしょうが……。

梅之助丈

そういう意味では、劇団前進座も直面している、いわゆる二世ということの問題なんです。ともかく劇団などは感情の動物の集まりですから、いくら民主的にあれといってもなかなかむずかしいことなんです。ただそうしたことから今改めて感じとったと思うことは、とにかく一人一人が仕事の上で発揮した力というものを大切にして、お互いの和ということを一義に考えなければならぬということですね。そしてもう一つ、「われわれは伝統を守ることになった」ということですね。伝統をしかりと学んでこそはじめて新しいものを作る可能性が生まれるということですね。そして今日では、「豊

かな実りを得るには種播きの時にやる」という諺があるように、僕たちにとっての関心は、「次の世代へ」ということ、次の世代をどう育てるかということが真剣に問われているわけです。どのように新しい時代に伝えて行くかという問題が重要ですね。

法主 その言葉は、大変に尊いことです。いつでも次のことを考えて行動しなければいけないということです。口では簡単にいえるんですが、次のものにどのように伝えて行くか、どのように教育して行くかということが実際に即して心配しなければならいのです。仏教の方でも、生まれながらの可能性を育くみながら、宗教家として責任を持てるような世代に導いて行かなければならないという大変な課題があると思うんです。

司会 確かに次の世代を育てるということは大変なことですね。現在では学校教育の問題が叫ばれています。が、家庭においても親子関係の断絶とか、家庭教育もなかなかむずかしいわけです。お寺の世界でも、親子ではなかなか育てにくいんですね。

梅之助文 われわれの方でも、十年前から演劇学校を作

って、若い人の実践教育をしているんですが、これも可成むずかしいことです。

ともかく基礎的な訓練を身体にたたき込むということのむずかしさを痛感している次第です。形から入って、そして心へと育てようとしているんですが、最初の形というところとも大変にむ

昭和五十八年

前進座『法然』劇

公演日程予定

大阪 二月八日～二十七日

会場 道頓堀 朝日座

名古屋 三月一日～二十日

会場 栄 中日劇場

全国巡演

月日	公演地	会場名
4/22	甲府	山梨県文化会館
24	平	いわき市市民会館
26	会津	会津市市民会館
28	仙台	宮城県民会館
29	山形	山形県民会館
30	秋田	秋田県民会館
5/1	青森	青森市文化会館
2	函館	函館市市民会館



—中村法主と司会者—

ずかしいことなんです。道を進んで行くことのむずかしさは大変なことでしょうが、今後ともお元気に頑張っていたいただくとともに、新しい後継者を暖かく育てて下さい。



—梅之助丈と同席された

津金実前進座営業部長—

本日は、大変に有益なお話、本当にありがとうございました。

31	30	29	28	27	25	24	23	21	20	18	17	14	12	11	10	8	7	6	4
長崎	佐世保	諫早	武雄	久留米	大分	小倉	萩	徳山	広島	福山	静岡	宇都宮	八戸	盛岡	弘前	小樽	札幌	旭川	釧路
長崎市公会堂	佐世保市民会館	諫早文化会館	武雄市文化会館	石橋文化センター	大分文化会館	小倉市民会館	萩市民会館	徳山市民会館	広島市公会堂	福山市民会館	静岡市文化会館	宇都宮市文化会館	八戸市公会堂	岩手県民会館	弘前市民会館	小樽市民会館	北海道厚生年金会館	旭川市文化会館	釧路市文化会館

(六、七月の予定は次号に掲載いたします)

特 別 寄 稿

樟 落 葉



樟落葉掃いて晋山式用意

牛 畝

大本山善導寺で一番有名なのは巨樟であります。樹齢八百年と申し伝えられています。八百年の昔と申しますと浄土宗二祖鎮西上人の御誕生以前のことです。上人は比叡山にて八年間学業を重ね天台の碩学として建

大本山善導寺法主

一 ^{いち}
田 ^だ
善 ^{ぜん}
寿 ^{じゅ}

久元年二十九歳で九州へ帰られまして三十歳にして只今の福岡市の油山の学頭となり九州第一の大学者となりました。油山と申しますのは油をたいて燈台の使をつとめた山と言うことと思います。玄海灘の荒浪を乗り越えて博多の港に帰って来る船の目印となったのであります。闇の生活の中に人生の燈台の役

をつとめたのが油山であります。油山を中心として上人は布教伝道の旅をつづけられます。ただ今は久留米市となっています。筑後川の近くに井上原と申すところで、広々とした森を通り抜けておられますと六人の盗賊に取り巻かれました。その盗賊が上人の説法によりまして、上人に帰依し善導寺建立の時骨身惜まず働いたとのことであります。今尚巨楠の横に六地藏してまつられています。

このことを知った発心山城主草野永平夫妻が、上人に帰依して大檀越となり建立したのが、井上山光明寺と申し、後に光明山善導寺となったのであります。

善導寺の巨樟はその頃より森の中にあつたと思われまふ。只今ではその木蔭は参詣者の憩いの場となり、その伸びています枝をくぐって参詣の人が続いているのであります。

六十三世の晋山式が近づきました。樟の落葉が頻りであります。檀信徒総出でその準備に忙しく、落葉を掃いて掃除をしているので

あります。みんな楽しそうであります。

六地藏の横に鐘楼があります。毎朝六時に撞いて、町中の人々に目覚めの合図の鐘となつています。覚醒した盗賊が六地藏となった如く、町中の人々に目覚めの合図をしているのであります。

芭蕉の門人十哲の一人野坡やばと言う人があります。大阪の人ですが善導寺の三門を入れば左側に小さな墓があります。野坡が善導寺に來たのは元禄十五年冬でありまして、その後二回来ています。筑後地方を訪ねて筑後俳壇を指導したために門人としての俳人が沢山であります。野坡は大阪にて死亡しましたが門人達はその菩提のために山内に墓を建てて供養したのであります。墓は元文庚申正月三日浅生翁寿元居士と刻まれ、浅生はその姓であります。建立者五人の名が刻まれています。後の流れをついだ鹿毛其程がこの巨楠の下に、

月影や四門四宗もたゞ一つ 芭蕉

と言う芭蕉の句碑を建てています。十年前に九州はとどぎす会の雄、『冬野』の主幹だった河野静雲師の句碑として、

楠若葉聖開山は筑紫人 静雲

を、地元の巨楠句会の人々が、この巨楠の下に建立し、私の入山を期して十周年記念句会が善導寺巨楠会館に盛大に行われました。

聖開山とは善導寺の開山鎮西上人のことで九州は昔から鎮西の国と申します。浄土宗は鎮西派と申していましたが、現在では浄土宗のことで、法然上人の正統をつかれました鎮西上人は九州が産んだ偉大なる筑紫人で法然上人の教えを正しく継がれたので鎮西派と申すのであります。浄土宗の二祖は勢観房源智上人が継がる可くと思われませんが、上人は清盛の長男、重盛の長男師盛の子で平家の正統

の人なれば、源氏の追討を遁れて元祖の弟子となられたとも考えられるところから、二祖とされなかったのではないでしようか。鎮西上人は香月の城主の血を引かれ、三十歳にて油山の学頭となられ、三十六歳にて明星寺の五重の塔を再建等々、九州第一の血統、九州第一の大学者、九州中の人々より帰依された三条件を具備された人なれば、この人を二代とすれば京洛の地には早や法難が起りつつあれば鎮西上人を二祖と決定して九州に帰せば、我が法然の教えをその假伝承させることが出来るとの先賢の明にて、鎮西上人を九州に帰されたと思われれます。

時に法然上人七十二歳、鎮西上人四十三歳であります。勢至丸さまの父時国公は四十三歳で死亡され、上人は四十三歳で父の遺言をまっとうし浄土開宗をされ、二祖は四十三歳の時二祖となられました。思えば四十三歳は浄土宗に取りまして因縁深い歳で、厄年を越えた有難い年と言う可きであります。

こんな世の中に善導寺の巨楠は伸々と繁って来ているのであります。幾多の戦火にも逢い火事にも逢いましたが枯れることなく榮えてまいりました。

九州における鎮西の門流は小さい法難はありましたが大した事なく流れをつないで来たのであります。どうか六十三世の法灯をつぐことになりました私のためにも巨樟が枯れることなく榮えて、浄土の教えを支える巨木として繁榮せんことを祈っています。

楠落葉踏み晋山の僧の列
肅々と晋山の列菊日和

牛畝
牛畝

菊日和授かり楠落葉を踏みつつ、晋山式の三百三十人の僧の列が続いています。

おごそかに開扉の偈文が菊の天に轟き渡り、静々と開門されますと、雅楽の響爽やかに、晋山の僧の列が菊の参道を青々と練って行きます。

釈迦堂より二祖廟へ参拝、それより法類を引き連れて本堂へ、

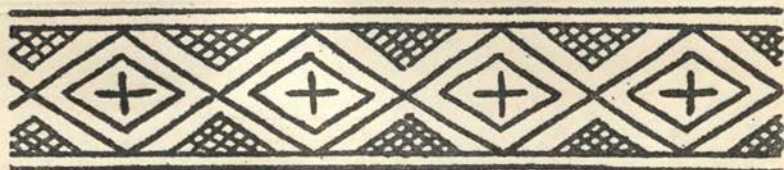
木犀の香に包まれし御本堂
牛畝

本堂を取りまく木犀の花にこぼれてその香に包まれている十五間四面の満堂の本堂の轟き渡る念仏の声に迎えられて本尊前へ、かくして晋山の式は厳肅に進められて行きました。

朝寝で有名であった私でありましたが、大森林に包まれた大本山で、

啼く百舌鳥に早起癖のつきし僧
牛畝

百舌鳥がけたたましくも、朝早く啼いてくれます。日一日と本山の生活にも馴れて参りました。そうなれば、本山つとめも出来そうです。本尊様や歴代の諸法將に守られて、役目を果たしたい覚悟であります。



(一) (口) (法) (話)

我は烏帽子もきぬ法然房也

むら せ ひで お
村 瀬 秀 雄

法然上人はいつも次のようにいつていた。

「自分は烏帽子をつけない無位無官の僧である。十惡を犯す法然房、知恵のない法然房はただ念仏を唱えて、極樂往生したいと願っているだけである」

「自分は烏帽子もつけない法然房である。黒い白いの區別も知らない子供のように、善いか悪いかも判らない愚かな者である。ただ念仏を唱えれば極樂往生できるという教えを仰いで信じている。釈尊は念仏を唱えて往生をとげるようにと勧め給い、阿彌陀仏は念仏を唱えれば必ず來迎すると誓い給うている。この二尊のお言葉を信じているだけであつて、その他のことは何も知らない」

ところが上人は多聞広学、知恵第一の高僧として崇められ、あるいは法皇や天皇にご授戒申しあげ、あるいは法皇の写經会に首座を勤める等の名声があつたのである。こうした上人が聖道門の教理を究め難いとしたのは、各宗の教義に精通していたからであり、聖道門の修行を難行道として捨てたのは、身をもつて悟っていたからである。つまりは自らの能力の限界を究めた末に他力本願の易行道を選び、わが国に初めて貴賤老若男女の誰れもが救われる浄土宗を開いたのであつた。

善導大師は自分と縁のある法門を選び、己れに適した教えによって修行しなければならぬとしている。それにはまず第一に己れの才覚と能力を反省し、自覚することが必要であるとして、次のように説いている。

「深心とは深く信ずる心のことである。何を深く信ずるのかといえば、第一に己れを自覚して罪業の深い身であることを深く信ずるのである。この身は罪業を積み重ね、迷妄の世界に沈んで流浪を続けていながら、いまだに迷いの世界から抜け出すための教法に会わなかったことを反省し、自覚するのである。そして第二には罪深い凡夫にとっては、阿弥陀仏の慈悲を仰いで極楽浄土に往生することを願う教えによるのでなければ、悟りを開く道が全くないことを深く信ずるのである」

法然上人がこの言葉をいかに感銘深く受けとめていたかは、ある人に送ったご返事に次のように記していることと知ることができる。

「善導大師のご解釈によれば、初めにわが身は煩惱具足の凡夫であることを信じ、その上で阿弥陀仏の本願を信ずるのである。もし大師が初めに凡夫という自覚を挙げないで、ただ仏の本願を信ずるようにと説いていたとす

れば、極楽往生を願っている大方の人々は疑惑を持ったであろう。たとえ本願の念仏を唱えたにしても、自らの心に貪りや怒りの煩惱を起し、身に十悪や破戒の罪を犯していることを思つて自らを卑下し、果して往生できるかどうかを迷い、仏の本願を疑うことになるであろう。阿弥陀仏の本願に十声一声の念仏を唱えた者まで必ず往生させると説かれていても、これは勝れた人のことであつて、普通の者のことではないと考えるであろう。大師がこのように己れの能力と仏の本願との二つを信ずるのであると解釈し給うていなかったならば、多くの人々は往生できないと危うく思うところであつた」

上人七十歳前後の頃に、二祖上人の聖光房、熊谷直実の法力房、選択集前半の筆録者安業房の三人と法談していた時に、次のよう述懐して涙を流された。

「善導大師が広く浄土の法門を開き給わなかったならば、われら凡夫はどのようにして生死の世界を離れることができたであろうか」

上人の教えは愚痴にかえつて心から仏を信じ、念仏を唱えるだけのことである。

法 話

お釈迦さまと阿弥陀さま



魚尾 晃久
うお お こう きゅう

(三島市願成寺住職)

先月二十六日、五重相伝を行った。本堂には二河白道がしつえられて、お釈迦さまと本堂の阿弥陀如来の間に一条の白い道が出来ている。一般受者の心の中には、お釈迦さまと阿弥陀さまとの関係がどうなっているのか、浄土宗のお寺だから、阿弥陀さまだけでいいのではないか、という疑問がある。一体、仏教には仏や菩薩が多い

すぎる。何が何だかわからない、という信徒の不満が見られる。浄土真宗では、「二尊のあわれみにはずれ」という一枚起請文の二尊の釈迦仏と阿弥陀仏は同等のものと解釈するが、浄土宗ではそうではない。

さて、二河白道であるが、これが、善導大師の譬喩である。法然上人もこれをそのまま引用して念仏の心境を

述べている。譬喩としては非常にすぐれたものである。ある人が西に向って行かんとするに、中に二河あり、一は火の河、二は水の河、南北にあって中間に白道あり、広さは四、五寸ばかり、この道が東より西に通じている。この人は直ちに走って西に向うと、群賊悪獣が来て殺されそうになる。西側は火の河、水の河である。休むことも出来ない。何れにしても死はまぬかれない。進退きまわった時に、東岸に人の声がして、その道を行けという。西岸にまた人の声がして、一心正念に直ちに来なさいと。この人進んで西岸に、到ることが出来た。東岸というのは娑婆の火宅の世界、西岸とは極楽の世界である。東岸の人の声は釈迦、西岸の声は弥陀、今二尊の意を信じて行動して、救済された、という譬えであり、それを儀式化したものである。

二河白道を渡り終った受者たちは、私の所にきて授朱印をする。いわゆるお手合せである。私の左の掌に、右の掌をもって来て、掌と掌とを合わせる。お念仏の伝統が私から伝えられるのである。お釈迦さまから、インド、中国の大勢の祖師たちを経て、私の場合には椎尾大僧上から——私——受者へと受けつがれる。こうして正授

戒は、受者たちにお念仏が私の掌から受け継がれるのだが、掌の感触は百人百様である。ゴツイ人、柔い人、暖い人、つめたい人、様々な感触のうちににお念仏の流れが新しく作造される、不思議な思いである。ここに、化他五重の生命がある。伝々相承の念仏の声が中止しない所以である。

腰がまがつていて、掌が私の左掌までとどかない老婆が介添えにつれられてお手合せをしました。民間信仰の力強さが、現実にあられてお手合せをしています。宗教は理窟だけでは出来るものではない、と瞬間感じました。お念仏の伝統がこうして伝えられて来た事実は、一寸むずかしいことですが、お釈迦さまが二河白道の譬喩にある根拠についてお話しします。

浄土宗では、このお釈迦さまを報身ほうじん仏といいます。仏さまの格式きせきを法身・応身・報身の三つに分類します。五重相伝で西の方、極楽へ急ぎゆきなさい、と教えた仏さまがお釈迦様です。全ての人たちを救おうとし修行を積んで、その報いとして完成された仏身ぶつじんのことで、その代表であるのがお釈迦さまです。だから急ぎ白道を通してそこへ行きなさい、と教えたのです。白道を通して阿弥

陀さまの所に到着し、その後、正伝法で念仏を伝えられたのです。こうした意味をもった五重相伝でした。

これでお釈迦さまと阿弥陀さまが、道場に置かれていた理由がわかった事でしようが、生身のお釈迦さまが、インドでお念仏を唱えなさい、と主張したわけではありません。ただその境地を、善導大師や法然上人を通じて、日本に伝えられたのです。

最後に、法然上人のお念仏について記しましょう。法然上人は念仏以外を一切否定しされたのです。上人は無理をしないようにお念仏を唱えなさいと励ましています。男女の区別もしないようすすめています。女人禁制の比叡山や高野山を批判しています。男も女も愚者も賢者も区別なく平等に救われる、というお念仏を主張しています。女性のお弟子もあれば遊女もその教えを受けています。非常に自然な教えです。酒も飲んでいけない、とは言っていない。自然な状態での称名念仏を提唱しました。苛酷な禁制しても人はそれを犯したがる。そういう無理のない教えでした。かつて叡山にいる時、戒・定・慧の三業を、これはとても私には実践出来ないと言って、山を下りる原因になったものと思われ

る。自から出来ないことを他に強請はしない。

だれにも、どこでも、いつでも出来る称名念仏を提唱して、念仏の力は拡張しました。一体、人は一日にどの位念仏が出来るか、と朝から寝るまで六万遍出来ることを実験済みでした。

ただ、法然上人のお念仏には二つの条件がありました。一つは口称念仏ということ、即ち声を出してお念仏を称えることと、二つにはなるべく多くお念仏を申すことです。念仏を申すことが第一で、仕事はつぎということ、念仏しながら仕事をする、という方法です。念仏が主で仕事は助業ということです。一にも二にも念仏、これが法然上人のやり方です。浄土宗の信徒はこの事を銘記しなければなりません。

◇“浄土句集”欄投稿要項

- 一 ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
- 一 投稿先——

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛



後鳥羽院と御製『無常講式』(三)

たからだ まさみち
宝田正道

(浄土宗出版室長)

三、配所生活十有九年

後鳥羽院の配所における生活は、なんと十有九年の長きにわたる。同じく「承久の乱」で佐渡へ流された第三皇子順徳上皇は二十一年間であったから、それに次ぐ長期幽囚である。しかも、いずれも僻地で土と化するまでであるから、「天皇御謀叛」に対する幕府の報復がいかに苛烈で容赦なかったかがわかる。保元の乱に敗れた崇徳上皇は、讃岐に流されて八年間の恨苦に耐えたが、その形相たるや

「生きながら天狗の姿」になるほどの凄じさであった、平左衛門康頼によって報告されている。その二倍以上の長い苦しい孤独と焦燥の歳月を、温暖で穏かな讃岐と違って荒涼たる絶海の孤島で、院は日夜どのように過ごされたか、想像するだに心は曇り、そぞろ胸えぐられる思いである。

陸路九十里、海上二十里、本土から離れて白波牙をむく日本海の真只中、柴の扉から見え隠れする月を眺めて都を想い、激しい身辺の変転の中にも、はじめは帰還の希望を唯一

の頼りに、ひたすら和歌の道に憂苦をまぎらわされていたといえるのではなからうか。

『遠島御百首』をはじめ、『新古今集』の敵撰（隠岐本）、『後鳥羽院御口伝』などを通じて、その悲壮な心境のほどをうかがうことができる。『御口伝』のときは、側近の一人教念上人が、遺芳の類「みな焼きすてられる中に、あまり惜しくおぼえて一巻盗み」写したから世に残りえた優秀の歌論であるから、他にも灰燼に帰した玉藻の書などがあつたかもしれない。また、そのような関係で存生中の諸種の諸録類も多く焼き捨てられたためか、日常の様子を知るべき文献もなく、口碑、伝説の類もほとんどないのは惜しい。配所でも幕府の監視が厳しく、秘密文書や不利な証拠となるものは、側近の者たちの手で、崩御とともに処分されたに違いない。

それはともかく、最初五、六年のうち、つまり承久三年（一二二二）以後、嘉禄二年（一二二六）頃までは、院も都へ帰れる日を心待

ちにしながら、和歌や刀剣の道に精進しておられたものと想像する。

しかし、京都では、その頃、承久の乱の殘党狩りが行われて、官方の首謀者の一人、二位法印尊長が密告により捕えられ、六波羅で誅殺されたのはじめ、群賊夜盜の横行、博奕の流行、旧仏教内部の抗争など、相変らず世上は不穩で、特に戒律無視、悪人正機を勧める念仏者への誤解は、反感や濡れ衣となつて凶悪犯の下手人とさえ目され、非難彈圧の対象とされていた。ことに、幸西一門の一念義の流行は、貧苦に喘ぐ下層階級にうけたのも事実で、彼らは同朋的徒党を組む集団行動を好む特色を具えていたため、一層反社会的悪徒と睨まれていたようである。

当時、法然の遺弟の中で、高足としてなお生存していた者には、法蓮房信空、善慧房証空、勢観房源智、空阿弥陀仏、それに九州へ走った聖光、越後へ流された親鸞、あるいは聖寛、長西、隆寛、幸西らも健在であつた。

承久の乱に連坐して但馬へ流された、院の第四皇子雅成親王(六条宮)は、順徳上皇の弟君に当るが、配所から逸早く隆寛へ念仏往生のことを尋ねて来られたので、彼は三カ条の篇目をたてて詳しく答えた。同様に聖寛へも不審の条々ご下問あったので、「念仏の本意はただ常念を要とし候」という請文を返したと伝えられている。ことに聖寛は、法然上人から「わが心を知れり」といわれるほどの信頼と、定家から「濁世の富楼那」と評されるほどの智弁を有した末代奇特の仁で、一山の明匠、四海の導師として特に公卿貴族界に重んじられた。そのため、信空や証空らとともに、南都北嶺の指弾からも外され、流罪の厄からも逃れていたようである。

だから、後鳥羽院からも、嘉禄二年の頃、西林院の僧正承円に宛てて遠所の御所からつかわされた御書の中に、「散心念仏の事一定出離しぬべく候わんよう、明禅聖寛などにくわしく尋ねさぐりて、最上の至要をしるし申

さるべき」由、ご指名で返書の要望があったという(『勅修御伝』卷十七、卷四十五)。とすれば、すでに在島五、六年の頃には、院も、あまりの孤独に耐えきれず、徐々に心を宗教、特に散心念仏の功德に向けられつつあったように察せられる。その信仰の深まる経過は、後述することにして、前記のような花洛の騒然たる世相と念仏停止の嵐の中で、ついに起きたのが、いわゆる「嘉禄の法難」であった。

事の起りを簡単に記すと、上野国の並榎の堅者定照という者が、念仏弘通をそねむあまり、『彈選択』という破斥の文書を作って、隆寛に送ったところ、隆寛は『顯選択』を著し、「汝が僻破の当らざること、たとえば暗天の飛碌のごとし」と嘲笑した。定照は怒って事を山門に触れ、奏聞を経て隆寛らを流刑に処し、法然の墓を暴いて死骸を鴨川に流すべし、という過激な計画を進言した。

嘉禄三年(一二三二)六月、勅許が下りたので、廟堂を破らんとする山門の使者を迎え

て、武門の帰依者たちはこれを拒むとともに信空らと相談して、とにかく夜にまぎれて秘かに遺体を掘り出し、法衣の上に兵杖を帶した宇都宮入道蓮生ら遺弟信徒の警戒裡に、西郊嵯峨、つづいて広隆寺来迎房円空の許に隠した。そして翌安貞二年（一二二八）正月、さらに西山栗生野の幸阿弥陀仏の許で荼毘に附し、やがて芳骨は貞永二年（一二三三）正月に二尊院の雁塔へ納められたのである。

かくて遺骸は凌辱を免れたものの、隆寛や空阿・幸西らは流罪にされ、『選択本願念仏集』の版本は焼却された上、念仏者は無差別に捕えられて草庵も襲撃破壊の厄に遭ったという。

こうして一時、念仏宗の洛中勢力は衰えたが、代って道元が中国北宋の禪を修得して帰国、安貞元年（一二二七）には京都建仁寺に入って『普観坐禅儀』を選述、曹洞禪を鼓吹して、翌くる貞永二年の春には、興聖寺を開創し、やがて本格的な僧堂、清規の完備に至る

のである。

一方、配所における院の心境は、前記の通りに、念仏へ傾きつつあった様子が窺われる。もともと院は、「われは法華經にみちびかれ参らせて、生死をいかにいでんずるなり」（鶴よりの御文）と述懐されているように、天台の宗教観は帝王学の一環として体得していたようであるが、身辺に浄土三部經や定朝作弥陀三尊像を所持、それに宸筆の觀經を厨子の扉に記すなど、浄土願生の念も深かった。前記嘉祿二年六月十五日の念仏に関する不審状にも、

六廻の春を仰といえどもいまだ一身の愁をなぐさめず、前世の惡業ちから及ところにあらず。しかるをむなしく日月ををくりて出離の行を決せず……一定出離しぬべく候はむ様、擬構て可_レ注給候、且如_二明禪記_一も被_二仰合_一て、委細可_レ被_二仰候_一。今生の事、いまは此の外不_レ可_レ有_二他事_一候。来世さへに空しく成候ぬと、心浮覚候也。近日

の上人などは、中々以外の新義ども多候て、雖信受二事にて候。(下略)

とある。いかに心細い、環境の中に沈んで、出離生死の正しいあり方を望んでおられたかが、胸打つ印象として迫ってくる。慰めの敷島の道だけでは一身の愁い止まず、「阿弥陀仏の御勤めなどに紛らはしてぞおはします」という『増鏡』第三(藤衣)の描写もなるほどとうなずくことができる。

たしかにこの頃は、都でも法然門下の間に一念多念その他「以外の新義ども」が多発してその義を水火と諍いその論を蘭菊に競うありさまで、先師(法然)念仏の正義はどこへ行つたのか、「末流濁乱、義道不似昔、不可説候」と勢観房源智を嘆息せしめたのも無理はない。

院の側近として随行したのは、西蓮(藤原能茂)、清寂(同清房)、寂信(和氣長成)、帰本(伊賀局亀菊)、それに聖教念ら、いずれも浄土教的法名をもった出家入道者であつただけ

に、都から聞えてくる念仏の「新義」は、かえって彼らの間に疑信と動搖を呼び、院自ら不審を決する書状を送ることになったのである。

いずれにせよ、院の信仰心は急速に念仏往生へ傾いて行つたが、さらに寛喜三年(一二三二)、配流後十年目には、愛息土御門上皇が阿波で崩御(三十七歳)という悲報が院へも齎らされた。都では寛喜の大飢饉で、幕府は人身売買の禁さえ緩和したほどで、邸内の北庭を掘り返して急抛麦畑に変えた藤原定家でさえ栄養失調を免れなかった(『明月記』)というから、飢饉に泣く庶民の苦しみは筆舌に尽し難いが、それ以上に決定的な傷心の打撃を受けたのが、五十二歳になって愛息に先立たれた人間後鳥羽院の噺び泣く姿であつた。

身は遠島に謫せられつつ愛児の死に、いよいよ無常を感じ、救いを仏に求めるきつかけをつかんだ院は、これを機に一層深く真剣な願生者と化していったのである。(つづく)



仏教英語にたずさわって(下)

原 弘
はら ぐち しょう こう

月一回であるが巢鴨の善養寺で行っている「禅ミート
イング」には、仏英研講師の、英語による止観及び一般

仏教の講義と坐禅の実習に、多くの外国人が聴講・参禅
している。また英字新聞のアナウンスメント欄に、いく
つかの「禅の集い」なるものが掲載されているのを見る
と、やはり禅は注目をあびているのを知る。その点、浄
土に対する説明は、容易やさしいようで実は英語では説明し
にくいところがある。「信」を抜きにしては語れないと
ころにあるのだろうか。あるいは浄土教という「行」に
対して、仏教にこれまでふれる機会をもたなかった外国
人には興味がうすいからであらうか。しかしながらそれ

でも鎌倉の大仏などには例年多くの外国人観光客が訪れ
ている。

仏英研でもこれ迄に外国人をつれて、二回程鎌倉方面
を散策した。昨年、光明寺を訪れたとき、石井真峯ご法
主から英語による三法印のお話しをしていただいたこと
は印象に深い。私自身、外国人に対して「浄土」をもう
少しアピールしたいのであるが、ご本尊・脇侍・先祖供
養・信仰といった面からの説明を、如何に、どのように
印象づけて理解させるか、うまく頭の整理がつかない。
勉強不足である。何とか相手に興味だけでもいいからも
たせたい。その意味で、仏像や仏画を通しての説明はわ

かり易いだろう。本堂に連れて行くのが一番である。

ところで前述の仏英研で、私達は年二回春秋に「外国人のための仏教文化を紹介するツアー」として、これ迄に塩山、鎌倉、比叡山、日光へと外国人を案内した。参加者を英字新聞あるいは定例研究会出席者に呼びかけて募る訳だが、回を追う毎に参加人数は多くなっている。

今年六月に行なった日光バスツアーには、定員25名をこえる程であった。私達の企画するツアーには必ず坐禅と精進料理を盛り込んできた。坐禅の体験と、精進料理を口にする機会は日常余りめぐまれないからである。そしてこのツアーは、参加者全員、自ら主体的に仏教にふれるよい機会なのである。参禅中用いられる警策に対しては、あらかじめ講師が、「この警策は、姿勢がわるいからといってパニッシュメントとして用いるものではなく、あくまでもエンカレッジさせる為に用いるものである」と述べておき、何故坐禅にこんな太くて平板のようなもので背中を敲くのか理由をまず説明する。また警策でたたかれたあとはむしろさわやかで、バシッという大きな音のわりには痛みが残らないで、緊張した気分がほぐれることを言って聞かせる。説明を聞きながら、半信半疑

ながらも参禅者は心をリラックスしていく。そしてゆったりした気持の中で、坐り方は慣れなく厳しいとはいえ、数息観により次第に心は安定していく。

目を開けてものを見つめ、新聞・雑誌・書物を読むことによって世の中のことを知る私達の生活の中で、目を閉じることによって我を知らうとする時間はあまりにも少ない。この際、坐禅と言わないまでも、一人静かに坐り姿勢を正して目を軽く閉じると、意外にも氣にとめなかった音に快い響きがあるのに気付く。秋風のさわぐ音、人の近づく足音、雨の日のボタンボタンという音、隣家の赤ん坊が泣く声、……。禅は説く、一分坐れば一分だけ、一時間坐れば一時間だけ、あなたは仏の境地に入ることが出来る、と。念仏もそうである。「仏まかせの身こそ安けれ」という境地は「我」をすてたところにあるのだろう。

ある仏英研の先生が今年の五月にブラジルに禅の話しをしに出かけたときのことである。講演が終わると、諸外国ではどこでもそうであると聞くが、聴講者は我も我もと一斉に質問を投げかける。その中でこういう質問を先生はうけた。「坐禅によってどういう利益がうけられ

るのですか」と。「坐禪の功德は無功德です」と先生は答えた。すると「無功德ならばどうして坐禪などするのですか」と質問者はたまたみ込んだという。彼らは理論によって納得する合理的な考え方しかもたないのである。また街を歩いているとき、ブラジルでは日本の武道がさかんに入っているせいか、先生が日本から来たことがわかると、こういうふうに訊かれたという。「アーニャア、カラテマスター？ オアーア、ジュードーマスター？」そこで先生は「ノー。アイアムア、ブディストマスター」などとやりかえしたそうである。

ところで私自身、今夏八月四〜十二日迄、マレーシアへ行つて来た。全日本仏教青年会からの要請で、日本からの代表団に加わったのである。マレーシア仏青全国大会参加と会議出席の為、なるべく英語がわかる人に行ってもらいたいとのことであった。全日仏青正本理事長を団長に、国際担当小林正道師ほか総勢十名であった。この中には、パネルシアターの古宇田亮順師も加わり、友好と親善に大いにその役割を果たしてきた。

マレーシアの仏青は在家メンバーである。それも青少年、高校生と年齢層が若い。全国大会の会場では、彼ら

はさまざまなプリントがほどこしてあるシャツを着ていた。たとえば次のような文字が背中に読める。

。 Dhamma Walk 羅 琳 氏

。 Know dhamma and make dhamma known

私はそこで“Gift of the Dhamma”の文字の入った丸首シャツをお土産として三枚買った。ほかにも仏教書出版物、仏教讃歌テープ、バッジなどが売られていた。私は英文仏教関係書物をすべて買い求めた。ここで彼らが売って得た利益はマレーシア仏青の活動資金の一部になるという。滞在中我々は各地域仏青との交流を深め、食事にもよく招待をうけた。古宇田先生のパネルシアターは大好評で「バナナの唄」が大はやり。会場を暗くしてブラックライトを使つての「貧者の一灯」「クモの糸」は効果満点で、皆熱心に見、そして聞き入っていた。私はこのとき逐次通訳をしたが、会場を移しての二回目の「クモの糸」のときは、英文資料を読み合わせ作成しておき、ゆっくりと読み、語った。出来れば次回には文章を暗記したいと思っている。

この国の人達は、日常生活の中で language barrier (言葉の障害) など感じていないと思われる程に、マレー

語・英語・マンダリン(中国語)をうまく使いこなしている。我々一行は、彼らすべての青年達から、言語をこえた、言葉には言い表わせない程の、心からの歓迎をうけた。「法」の絆が強く感じられた。

車窓からみる景観に、我々はモスクと呼ばれるイスラム寺院をよく見かけた。私自身道ばたに大トカゲが這っているのも見た。仏教寺院へ我々が案内されると、まず本堂正面に坐って合掌し般若心経を唱える。彼らはこれに対して、ギターを持って仏教讃歌を唄う。仏教讃歌とはいえ、実にメロディーが明るく、英文歌詞がまたすばらしくよいのである。彼ら仏教の仲間がバスの中、海辺、本堂などでよく唄って聞かせてくれた歌の中で、*"Sunrise comes" "Homage to Buddha"* などは私の気に入った歌であり、日本に帰ってきてからもしばしば口に出して歌っている。

マレーシア仏教青年会(YBAM)で作ったマッチに、次の文字が入っているのに目が止まった。参考までに紹介しておく。漢英両語で書かれてあるが、それには

忍辱為最高修行

Forbearing Patience is the Highest Devotion

健康最上利 知足最上財

Health is the Highest Gain;

Contentment is the Greatest Wealth

諸供養中 以法供養 功德最大

The Gift of Truth Excels All Other Gifts

とある。

我々もいろいろなものを利用して、視聴覚の分野でこれからもっと仏の教えを弘めていかなければならぬ。

仏教東漸とは言え、仏教が日本でとどまることなく、さらに諸外国にその教えを知らしめなければならぬ。法は人による、と言われるように現在でも多くの開教師が、ハワイ、アメリカ本土、南米へと渡っている。ハワイでは開教寺院をささえているのは一世、二世ではなく、最早や三世、四世の時代に入っている。そこでは開教師は語学の習得如何によって、住民にとけ込めるかどうかという大きな問題をかかえている。教化の対象となる三世、四世は英語教育の中で育ち、日本語は生活環境上入ってこないからである。

国際人、国際化が叫ばれている今日、日本を見直すためにも、「コトバ」と「ココロ」と目だけは外に向けたいと思う。

浄土句集

一田牛畝選

とならん。

寝莫産売り柳川訛今年又

福岡 高良 慈風

群馬 島津 か寿
敬老日晴れてうれしくお念仏

評 敬老の日には色々な年寄りを喜ばせるために行事がある。みんなお天気であれかしと折っているのであるが、日和を授かるとうれしくて思わず口よりお念仏が出でて、天地一切に感謝するのである。

三重 森 静枝
幼児の墓に添ひ咲く^{すゝめ}萱かな

評 萱は可憐なつつましやかな花である。その花が幼児の墓に寄り添うて紫にうつむいて咲いているのは実に愛らしい。

福岡 原 敬二郎
百歳を目前にして土用灸

評 作者の伯父は近頃満百歳になられた医学博士で、そして灸で博士号を貰われたという珍しいお医者さんである。老いてなお沢山の患者を持っていられるのである。そして百歳になられて土用灸をされているのである。

山形 松田 光誉
嫁とりの話や秋の彼岸婆

評 彼岸詣りの婆は、お寺詣りが楽しみである。彼岸と申せば春彼岸で秋は特に秋彼岸と区別されます。嫁の悪口を言ったり、ほめたりで賑かである。昔と違って現代は嫁を苦しめるより、嫁より苦しめられる方が多いらしい。こんな世の中で嫁とりの婆達の話は昔とは違っているこ

評 柳川とは九州筑後国の立花藩で、そのあたりは細長い緑の円茎をまっすぐ群生して三、四尺位になる水草で夏のころ刈り取ってきて畳表としたり、寝莫産を作ったりして売り歩くのである。その産地が柳川であるから土地訛を出しているのである。柳川泥鰌も同地の産である。

長野 友淵旋風子
虫止んで雨音激し丑の刻

評 虫の夜、雨が降り出した。雨音に虫の音が消されて行く。丑満ともなれば静かであるのに雨に消される虫は悲しい。

福岡 永江 隆説
初孫の産声高し楠若葉

評

待ちに待っていた初孫が産れた。しかも男の子である。無ぞかし産声は高く、その孫を表象するように、家を取り巻いている楠若葉はのびのびしている。

老僧の二杯半なる豆の飯

福岡 前田 秀峰

稲妻の人間空を走るかな

福岡 行正一如子

秋立つや法衣袴を入れ替へぬ

山形 松田 允子

川面に群れる鴨や秋の風

三重 山田 うた

萩たれてやゝ気の重き母のこと

東京 吉田ゆき多

向き合ふて僧と座談や扇風機

福岡 尾田 秀童

朝々の庭木の動き夏めきし

福岡 上滝津弥音

うなだれるダリヤの真紅雨はげし

山口 上野 明達

病院に別れ新秋の山に對す

福岡 山崎 鬼川

盆三日一日は雨二日晴

大分 丹羽 難中

俄か雨盆踊りの輪崩れけり

福岡 植藤みきを

盆僧の声のかれたる読経かな

福岡 荒牧 木魚

吹かれつゝ秋蝶沈む草の原

東京 細田 初枝

卒寿母読経生甲斐声涼し

福岡 服部 光代

献血を済ませ安堵の秋の墓

山形 佐藤 緑石

月影に照され弥陀の笑み在す

福岡 荒牧 亀齡

仏壇の灯りし秋の彼岸かな

福岡 深井 鉅士

新法主施餓鬼法話の博多弁

福岡 沢河野ねはん

秋めくや満中陰の母納骨

福岡 稲永美恵子

帯蝶に結んで子等の盆踊り

福岡 山崎 江舟

客見えぬまゝ打水の早や乾き

福岡 木下富士女

声落す時逆縁の十夜風謡

一田 牛畝

よし 水 正 三
吉 水 正 三

(東京・足立中川善応寺住職)

ある同級生

となりの国の留学生が

卒業記念のアルバムに

書き残していった言葉

天破石驚(天破レテ石驚ク)

意味はよく分らないが

戦争の中へ帰っていく

学生僧侶の想いがこめられている

あの青々と刺った頭が

今でも目にのこっている

なまりのある日本語で

別れの言葉を言いにきて

生き下手

時を追いかけて

昨日も今日も

後悔ばかり

時はうすずみ色

この先も

迷い迷いゆくだろう

生き下手だから

道のない道を

すべってころんで

疲労ばかり

行く先は霧の中



詩、二題

形見に書いた詩の一節

淡如水（淡キコト水ノ如シ）

なんとなく分るけれど

重苦しい顔で祖国を思う

学生僧侶には悲しすぎる言葉だった

あのきびしい口調の聲が

今でも耳にのこっている

はげしい戦争が

あれから何年もつづき

天も破れた石も驚いた

だけどあの学生僧侶は

生きているだろうか

水のように淡い人の世に

小さな小さなエピソードがあった

昔々のお話です

足跡に

花びらを残してゆこう

歩き下手だから

きれぎれの歌が聞こえ

星のおう夜は

孤独な幸をまさぐり

背中合せに愛とねる

夢をふりきり

慣れて怠けて

諦めばかり

夜は深い海の底

あと幾年

ひっそりとゆくのだろう

生き下手だから

念仏信仰の日々

— なつかしきのわく暮らし —

関谷喜与嗣

(滋賀県長浜市在住)

わたくしは昨年三月まで滋賀県立養護学校に勤めていました。三十有余年の教員生活のうち、十二年間、心身に障害を持つ児童生徒の教育にたづさわらせていただいたことを喜んでいきます。

滋賀県では今から十四年前にはじめて肢体の不自由な子どもさんたちを収容する養護学校が近江八幡市に設立されました。県下から集ってきた子は全員寄宿舎生活で寮母さんのお世話になって、学習がはじめられました。

母のなき配膳なれど掌を合わせ

かたじけなくも箸をとる子ら

この一首はこの子たちと向い合って、寄宿舎の膳についたとき詠じたものでありますが、今まで、家庭にあって、お母さんを唯一のたよりにして、生きてきた子は、夕暮れになると、なかなか部屋に入りません。

「カーチャン、カーチャン——」と泣き叫びます。

廊下に立って、八幡山に向かい、出せるだけの大声をあげるのです。そうしますと、そこにお母さんがおられるような心地になって、泣きじゃくっていた子も、いそいそと食堂に入ってまいります。ようやく膳につきますが、なかなか、その手がお椀にも、お箸にも、とどかな

いのです。やっと、とどいた手で、スプーンやストロンを
持とうとしますが、握りしめられないのです。両の掌を
胸のところへあげ、親指と親指をあわせようとします
が、あわさりません。

「いただきます」というひとことを、声に出そうとし
ますが、唇がつき出て、舌をまるめるだけで、ことばにな
りません。

ようやく、一すくいのご飯を口もとにとどかし、のみ
こもうとしますが、舌が思うように、のどの奥まで運ん
でくれないのです。

わたくしはこの姿に触れたとき、この手、み仏のみ
手、この足、み仏のみ足と思わず合掌せずにはおれませ
んでした。今まで健康で身体に何不自由のない中学生を
相手に暮らしてきたわたくしは、あらためて、この手の
筋に流れる血潮を押しいただき、この掌で一すくいの水
を頬にあびせられる幸福をおもったのであります。

お食事がようやくすんで、床につこうとしますが、そ
こに、お母さんがおられない淋しさがこみあげてきた子
は、また、カーチャン——と母を呼ぶのです。寮母さ
んがどんなに、なだめ、すかしても耳にも、肌にも、感

じなかった子が、電話口にお母さんの声をきいただけ
で、安らぎをおぼえるのです。

「母を呼ぶ声」の何とすばらしいことでしょう。南無阿
弥陀仏という一声一声の称名も、お母さんを呼ぶ声であ
ったのです。

自分の名前も、まともにかけないで十何歳まで、家庭
にあって、お母さんの懐にだかれるごとくにいた子にと
って、この世に生きていくために、たよりとなり、力と
なるものは、お母さんしかいないのです。そのお母さん
は、この子を寮母にあずけて、別れるとき、袖をひきち
ぎられ、うしろ髪をひかれる思い以上に、泣きすがる子
を、心を鬼にして、ふりきって、わが家に帰りなざるの
です。もう今ごろは、きつと食堂で、泣きながら、食膳
についていることか。廊下に出たまま、泣きしやがんで
はいないか。「如来様、この子にこの一時、夕げの糧を
お与えください」と人しれずにかけて祈っていなさるの
です。この祈りと願いは、はるかに離れて、ただ母を呼
ぶことしかしない子に響かないことはありません。

子どもがお腹に宿ったとき、成長する過程で最初に人
間らしい機能で、それをうけとめることの出来るのは、

聴覚の働きであると臨床心理学を研究しておられる安松昭道先生からおきました。だから、子どもを平安な状態に育つように願う母親は、まず、自分自身の心臓の鼓動を平穩にし、荒立てたり、怒ったり、烈しい悲しみをおこさないようにしなければなりません。

「人の子は、発育が正常なら、生後八カ月ぐらいいなると、ひどく変った目の色をします。なんだか非常に遠いところをみて、なにか思い出そうとしているようでもあれば、また、ひどくなつかしそくでもある。」と数学の岡潔先生は『春の草——私の生いたち——』（日本経済新聞社出版）でのべておられます。母親が、お腹に宿った子を立派に育てるには、この子を宿したときから、まず「なつかしさ」の心を養うようにしなければなりません。母と離れた子が、母をなつかしむのは、母がその子がよい子に育ってくれるようにと常に念じ通していたためであつたからです。

この世に産まれ出る前から、母親の血の流れに、「なつかしさ」が燃えつづけていたのです。

「大いなるミオヤは十劫正覚の暁より、可愛き子を持ちわびたもう……久遠劫むかしより、いまのいまに至るま

で、かわゆき子の面の見たさ、また、子を感じる親の心を知らせたさに、番々出世の仏たちをお使わしなされて、苦心慇懃に子らにさととして、ミオヤの大悲のみ手に渡したまわんとせし、久遠劫来の思念がかかり、大悲招換のみ声に預かりし道士の、至心信樂の心を注ぎて、したわしき吾が大ミオヤ、ナムアミダ仏と呼ぶ声を、毫も、遠からぬ道士の前にまします、大ミオヤは、さぞ、かぎりなき、よろこびをもつて、これに報答しますらんと信じられて候。

道士よ。み名を呼べば現に聞きたまい、敬礼すれば、アナタはみそなわしたまい、ここに念ずれば、アナタは知りたまい、こなたより憶念し奉れば、アナタは幾倍か深く憶念しくださる」と、弁榮上人はお便りを書きのこしておられますが、

念仏信仰の日々において、子が母をしたうおもいで、み仏をおしたい申しあげる心がなければ、み仏の心に触れ、み仏の心と一つになったよろこびも、生き甲斐も、真実のものとはなりません。

わたくしは昭和四十二年九月より毎月一回以上、奥比叡横川中腹飯室谷松禪院へ詣で、千年杉の大樹のもとで

念仏を称えることにしています。歩みつづけ、称えつづけていますうちに、日本仏教に花を咲かせ、光をはなれた人たちがこのあたりで決死の修業求道に打ちこまれたことがひしひしと感ぜられてまいります。石の上に坐り、苔に額をつけ、老杉を抱えこんで、ナム、アーミ、ダーブと声を限りにみ仏のみ名を呼びますと、あの親のもとを離れた子どもたちが母を呼びつづけるところが、胸の内にしみわたってまいります。そして、そこに、伝教大師が立っておられ、法然さまが善導様のお声をおききになっておられるような思いがします。

八百年、千年の時間を超えて、わたしの近くに、なつかしいわたしの父があらわれ、慈覚大師、慈恵大師のご苦勞、ご念力が、わたしに日本仏教の粹となってナムアーミダブツを称えさせてくださる思いがします。

元祖法然上人様も、幾たびかこの幽邃の地に身も心も投げこまれたことでしょう。

恵心院あとの入口には「南無阿彌陀仏、極重惡人、無他方便、唯稱彌陀、得生極樂」と刻まれた石柱が建っています。このあたりで、あの地獄、極樂、六道、十界の図が描かれ、『往生要集』が著述されたのかと思います。

と、一木一草、一石一鳥もみなみ仏のみ手、み足のごとくなつかしさがこみあげてきます。

恵心僧都のお母さんも、法然上人のお母さんも、諸仏諸菩薩に、その聖者の胎内にいますうちから深い祈願をこめて、み仏のみ子として生れ育たれるようにと念ぜられたればこそ、母のところに報い、母のころと一つになれるよう「なつかしさ」のわく、この比喩でも、最も静寂な地をえらんで独坐独行真実の声を聴きとめようとしたのだと思います。

念仏信仰は、(一)「聞く」(二)「観る」(三)「行ずる」、の三拍子がそろわなければなりません。聞くという心は、きけるような心になったとき、耳をすませることができます。澄んだところに身を投げ込むことによって、「至誠心」が養われ、そこにのびるみどり樹木の山々や、花の雨にしたることによってなつかしさがわいて、本当のものを「観る心」が育ち、その心が「信樂」し、念仏を生活に行ぜざるを得なくなると信ずるのであります。

わたしはこうした意味から、童心をなつかしむ心をもって一息一息、念仏信仰を深めたいと思っています。

◇◇◇『浄土句集』欄への投句のお願い

—及び俳文等の寄稿のお願い◇◇◇

『浄土』誌本文中のオアシスともいふべき、『浄土句集』欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生（大本山善導寺法主・一田善寿大僧上台下）の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させていただきます。

さて、この『浄土句集』欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しくお願いします。

一、内 容 俳文、句会便り等の随想

一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度

一、締 切 毎月五日

法然上人讃仰会



念佛ひじり三国志

(百二)

一法然をめぐりて

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



左ノ獄で、寒夜が容赦なく更ける。

二月の京、冷気は夜更けとともに凄さまじくなる。石造りの床は、そのまま氷質に凍結してしまった感じである。与えられた薬床を掻き寄せて、いくら身体に巻きつけても、腰のあたりは無感覚だ。血流が停止したのであらうか。

住蓮は、この冷気で眼をさまされた。それきり寝つかれなくなった。

かたわらの明善房へ視線をやる。さすがに若い。傷の痛みも消え、昨夜の不眠を取り戻そうとするのか。正体もなく眠りこんでいた。

「二月も終るか……」

呟いてみて住蓮は右京権大夫隆信の顔を思いうかべていた。彼が往生の素懷を遂げたのは、つい一昨年元久二年（一二〇五）の二月二十七日であった。

往生の素懷——出家者の入寂時、世人とりわけ僧侶仲間にはこんな表現を安易に用いる。隆信も「戒心」という僧名を得た出家者だったが、そうは容易く「素懷」が遂

げられたわけではない。

住蓮が安楽房と右京大夫邸へ出かけていったのは前日の夕刻であった。師の法然へ迎えの使者が立ったのだが、あいにく法然自身も病臥中で兩名がかわって見舞った。

「寒い、寒い」

と隆信は咳こみながら、かぼそい声で訴えた。

たしかにこの年の二月も冷気はきびしかった。だが住蓮には、気温以上に隆信の内側から吹きとおってくる「死の風」を思わずにはおれなかった。隆信の氣息が刻々に消滅へ急いでいるにちがいない。

住蓮はずっと以前、師の法然が四条堀川の太郎を説戒したときのことを思いうかべた。

四条堀川の分限者太郎は最愛の妻を文治元年の大地震で失った。生きる氣力をなくした太郎は自暴自棄におちいり、酒に身を持ち崩した。墜落する一歩手前で法然とめぐり遇った。法然は念仏をすすめると共に、新しい生活の道を指示した。

失われた愛する命の身がわりとして、新しい生命を育てよ、であった。太郎は愛宕の奥山に杉苗を植えはじめ

る。

杉一本を育てあげるにも念仏の功德が必要となる。念仏の功德がかさなれば、杉はすくすくと育つ。地震で横死した愛妻の新しい生命がそこに宿る。

——生けらば念仏の功つもり。

と、法然は、住蓮をともなつて出かけた堀川の太郎の愛妻の年忌法要で、太郎自身に強く説法した。そのころ太郎は、杉苗の植林が機縁となつて手広く木材商を営む身となつていた。以前にもまさる大分限の地歩を固めたのだった。

もちろん右京権大夫隆信に残された生命の時間は幾ばくもないであろう。堀川の太郎とは比べものにならない。だが、どんなに持ち時間が短くなつていても「生きている」ことに変わりはない。「生けらば」なのである。それなら「念仏の功つもりせ」ねばならない、と住蓮は思った。

やつれ果ててすでに死相が現れた隆信の顔を覗きこみ、

「念仏を唱えるんだ」

叱り飛ばすように言つた。

＜宮中の女御＞



「念仏だつて？ わしはもう声が出ない」

息も絶えだえに答える。

「何をおっしゃるか。立派にしゃべっているではないか。わしや安楽房が左右から助音する。さあ精一杯声を張りあげて……」

安楽房も住蓮が語る意図を適確に把握したようであった。

「隆信どの。起き上がりなさい。念仏して、病いなぞ駆逐して、また一枚新しい絵をかいて下され」

言わずと知れた右京権大夫隆信は、似絵の名手であった。

その子信実などが手を貸して、隆信は病床で起き上がった。合掌し、左右から助音する住蓮、安楽に合わせて唱名念仏を声高らかにはじめた。みずから発声したことで生気を取り戻した隆信は、微笑みながら左右をかえりみて、

「住蓮どの。来迎讃もとなえたてまつろう」

と言いだした。

住蓮や安楽に異存のあるはずはなかった。三人は声をそろえ、音律もたおやかな六時礼讃をうたいはじめた。

当時の皇族、貴紳たちの臨終は、陰陽師や僧を枕頭に招き、加持祈禱をさせ、僧たちがもの静かに唱える経文読誦のなかで、病者は眠ったまま絶息してゆくのが、常のすがたであった。

それがこの隆信、死の前夜から自身が念仏や来迎讃に加わって、異父兄にあたる藤原定家もその日記「明月記」で、

——今日聞ク。右京権大夫入道。日来病悩。夜前スデニ入滅スト。聞キ及バズシテ病イヲ問ハズ。

臨終ノ体、殊勝。高声ニ念仏シ、清衣ヲ著ケ五

色ノ糸を引キ、坐シナガラニ終フト云々

とつたえている。

隆信朝臣は、最低あれで一日は生き延びたぞ、といま住蓮は酷寒の獄房のなかで回想する。

息も絶えだえだったあの時を念仏や来迎讃で乗り切つて、翌日も陽のあるうちはすこぶる元気であった。日没とともに、西方の国へ招じ入れられるように息絶えた。師の法然がつねづね口にされている「生けらば念仏の功つもり、死なば浄土にまいりなん」をそのまま体現した往生相であった。隆信の表情に死の暗い影は微塵もな

く、続く法然の言葉「とてもかくても此の身には、思いわづらふ事ぞなきと思ひぬれば、死生共にわづらひなし」そのままだったと言える。

住蓮は、がばと薬床の上へ起き直った。膝をそろえて端座すると、胸で合掌した。

この左ノ獄へ投ぜられて以来、忘却していたことがある。念仏である。あの那智ノ校校長嚴法師との闘争のみに明け暮れて、かんじんの念仏を唱えることを、どこかへ置き忘れてしまった。

どんな運命が前途に待ちかまえているか。それはわからない。いや、わかる必要もあるまい。この生きているひととき、念仏を怠っては、何のための下獄であるか。師の法然の身を護り抜こうとする生き甲斐——それは取りも直さず専修念仏を護持する以外の何ものでもなかったはずだ。

念仏こそ生活の軸芯であり、往生はその延長線上にしか実在しないのである。

再び師法然の言葉を想い浮かべる。「念仏申さん者十人あらんに、たとい九人は臨終悪くして往生をせずとも、我一人は決定して往生すべしと思ふべし」

静かに念仏を口ずさみはじめたときだ。住蓮は遠く獄舎の彼方から響いてくる別人の声を耳にした。

当初は寝言か、いびきかと思った。

だが、おのれが口ずさむ六字の名号と、遠くで響くその声もびったり和音しているではないか。

誰かが念仏を唱えている。この深夜、獄房の一隅で、住蓮と同じように念仏を唱えている。

石畳の廊下に乾わいた警杖の打音をこだまさせて、夜まわりの獄吏が近づいてきた。

瞬間、住蓮は念仏を中止しようか、と思った。獄吏との不要な衝突は避けたかった。でもすぐに、師法然が最後に言い放った言葉が胸でよみがえった。

——たとえ死刑になろうとも念仏はやめない。

それこそ「生けらば念仏の功つもり」ではないか。

住蓮はことさらに声をはりあげて高声念仏をつないだ。

「うるさい」

髭面が格子の間から覗きこんだ。

「南無阿弥陀仏」

住蓮の答えは、これだけであった。

「静かにするんだ」

いつも来る若い獄吏ではなかった。髭むじやらの中年男は外側に取り付けた格子のくぐり戸のカンヌギを引くと、獄房へ身体半分をさし入れた。

「寒い、耐えられぬほど寒い」

住蓮は正直に告げた。

「贅沢を申すな。これが獄だ」

「寒いから念仏を唱えて、しのいでいる」

廊下へ引きずり出して警杖でめった打ちにする様子でもない。

「その念仏を唱えていると、暖かくなるのか」

意外とおだやかに問いかけてくる。

「暖かい」

「ふむ」

遠くでする念仏の声は、相変らず途絶えない。

「向うでも、誰か念仏を唱えているではないか」

此方ばかりを停止させるのは片手落ちだ、と住蓮は抗議するつもりだった。

「それなんだ」

「何が……」

「向うのひじりもやめようとしな。他の者の眠りをさまたげる。お前、向うの獄房へ移らんか」

「向うの？」

住蓮の表情が喜色で染まった。

何処の誰であるかはわからない。だが念仏ひじりであることは間違いないだろう。その男と同室できるとは

「ただし、夜が明けるまでだぞ。向うのひじりは独りで

閉じこめておくようにと、きついお達しじゃからな」

「ゆこう。夜明けまででもいい」

「両手を縛るぞ。出せ」

風体や言葉つきに似ず、この獄吏、心根は優さしいようであった。住蓮は素直に両手をさし出した。腰に下げた捕縄でしっかりと縛った。

ずいぶん距離があった。そればかりか、石畳の廊下を二度も屈折し、さらに穴倉のような通路を降りていった。

半地下の独房だった。

近づいて、そこから洩れる念仏の声はいよいよ高まった。これほど大声で唱えていたからこそ、住蓮の獄房にまで届いたのであろう。

美声の念仏――

住蓮の顔のなかで喜色はいよいよ色濃くなった。

まぎもなく安楽房連西であった。

夜が明ける直前、迎えにくるからそれまでだぞ、と念を押して髭の獄吏は去った。住蓮と安楽との関係を知っているのはからいであつたのか。同居囚たちの眠りをさまたげるといふ単純な理由からであつたのか。住蓮にはこの処置の謎が最後まで解明できなかった。

再会を悦び合った。お互いが長岐法師から受けた取調べの内容を交換した。

会話の間で兩人とも高声念仏だけは途切らさなかつた。それを中止したら住蓮がこの独房にとどまる理由はなくなってしまう。

「山法師の奴、南無阿弥陀仏。詰まらぬ脅しをかけてきたぞ」

と安楽房が語る。

「南無阿弥陀仏……何のことだ」

「臣下の身、それも僧たる者が太上の君の妃とマグワったとき、どんな刑を受けるか承知しているのか、とぬかす……」

「どんな刑なんだ……」

「唐の古法に照らすと『宮刑』だそうな」

「宮刑とは？」

羅刑とも呼ばれた。男性の象徴を切断し、あとの手足を禁じて独房に閉じこめ、そこから腐蝕がはじまり全身がおかされて悶死するのを待つ、という苛酷な体罰であつた。

安楽房が密通した相手は、皇子を後鳥羽帝との間でなした坊門局ではないか。皇妃と密通した男にそんな刑が実施された例は、中国の宮廷では枚挙にいとまがない。

「おぬし、そんな屈辱に耐えられるか。汚名を末代にまで残すのだぞ、とあの山法師は言いつの……悪しきは法然房ただ一人ではないか。彼の教法に随つたまで、と証言するだけでいい……おぬしは即座に釈放されるであらう、とも言ふ」

「それで……」

住蓮もうそ寒なってくる。

果たしてそんな苛酷な刑をちらつかせられて、人間がよく忍び得るであらうか。

「山法師はこんな誘惑も持ちかけて来よった。法然と絶縁さえすれば、おぬしほどの器量人、また多くの念仏信者に慕われる身だ。たちまち信者どもはおぬしの膝下へ集合してくる。法然にもまさる大教主になれるんだぞ、とな……」

「それで……」

住蓮はさらに問い続けた。

安楽房はからからと打ち笑った。

「わしがそんな甘言に乗ると思うか。かりに法然ご房はごま化せるとしてもだ。阿弥陀如来は欺ましおおせぬ」

「山法師にそう言つてやったのか」

「言つたとも。お前こそそのぶら下げておる物をちょん切つて、出直したらどうだと。南無阿弥陀仏」

「わしと同じようなことを言つたな。わしも七条院とのなま臭さい関係を冷やかしてやつたわ。南無阿弥陀仏」

「山法師奴、怒り狂つたであらうが」

「まこと、おぬしの申すとおりだ。人間は欺ませても阿弥陀さまはそうはまいらぬ。こんな羅物は切断されても

わしらの心は西方お浄土へ参ることができなのだ。南無阿弥陀仏」

そこで兩人は再度、この法難を女犯という卑少な出来事に縮少することで、専修念仏の大義をゆがめないように行動する誓いを確認し合つた。

独房の低い天井を見上げて安楽房は、念仏の合間にぼつんと呟いた。

「今ごろ法然ご房はどうしておられるかな」

「うむ。小松谷の荒れはてた御堂にいらっしゃるであらう。わしも最後にそこでお会いしてきた」

「重盛内府の小松御堂か」

「ことさらにご決意も新たにされて念仏に励んでいらっしゃるぞ」

「御病悩は？」

「それがとみに元氣になられておる」

「ではわしらが此処で唱える念仏とも和合するわけだ」

「和合するとも。ぴったりと」

いちだんと兩人が唱和する念仏の声は高まった。

安楽房邊西が六条河原で、大衆が見守るなかで処刑されたことは、法然諸伝がつたえるところである。また慈

円の「愚管抄」も頭を刎ねられたとしている。

当時、洛中でこんな落首があったという事実も見逃し得ない。

世の中に罪を念仏者のある時は

妙法まらぞ頭を引き切る

羅刑——宮刑が実施された噂が巷間に広くばらまかれたものではあるまいか。

もしも現実に宮刑が実施されたとしたら、この国の刑法史上では最初にして最終の極刑ということになるであらう。

三

法然と門弟の念仏ひじりたち。

この強靱な結び付きを分断して、師の法然を処刑する。そして専修念仏教団を一気に潰滅させる。

安楽房もあの手この手で、泥を師の法然になすりつけることを強要された。しかし彼は頑なにゆずらず、坊門局との密通を主張し続けた。

思えば不可解な倒錯心事であらう。

密通という不名誉な醜聞は、事実であっても隠しておきたいものだ。それを、わざわざ前面へ押し出している。

取調べ側では否定したがっている。そんな事実はなく、坊門局に参籠させたり、一条家の鈴虫や松虫を剃髪させたのはすべて法然の差し金だった、と一言浪らしさえすれば身柄の釈放を確約しているのである。

だが安楽房、人間は欺ましても阿弥陀仏は裏切れない、という不壊の信念から、みずから泥まみれになることを、いや命をも失うことを厭わないのである。

このあたりの心事を、倒錯と解するか、正常と評価するかによって宗教というものの理解度が判断できるであらう。つまりこの倒錯心事こそ、宗教の世界にあっては正常であり、純粹だったことになる。

安楽も住蓮も阿弥陀仏は欺ませない、と主唱したが、その阿弥陀仏が生ま身の姿で現れた人こそ師の法然だ、と信じて疑わなかったからである。この法然を守るためならば、いかなる苦しみにも耐えるであらう。

住蓮の前にも懐柔の使者が立ち現れた。興福寺の僧綱

宗源房であつた。

田淵宗源とは古い馴染みである。お互いに興福寺の衆徒では名門の育ちだった。少年期を過ぎると、どちらも侍大将格になった。平重衡による焼打ちの折、辛らくも生きのびた仲である。

住蓮は南都を捨てて念仏ひじりの群れに身を投じたが、宗源は興福寺へ戻った。そのまま衆徒雑人の頭目となる道を進んだ。現在ではその総司令とも言うべき僧綱の地位に任じ、こんな出自では異例の大僧都の僧階まで獲得している。

その朝、住蓮は獄吏の詰所へ呼び出されたのだが、座敷に宗源が待っていた。別所の清水寺へ所用があつたついでに立ち寄った、と言って手土産の餅や唐菓子差し出した。

お裾分けを受けた獄吏たちは氣を利かして詰所から姿をかき消した。

「もっと喰え……よほど苦労したとみえる。やつれたのう」

なつかしげに住蓮を見やり、昔に変わぬ友愛の笑みを投げた。この友愛を受容することに住蓮もためらわな

い。

「おぬしは会うたびに福相になってゆく。立派な僧都さまだ。荒法師の面影なぞ毛ほどもないな」

「いいや、この方はだいぶ弱ったぞ」

と僧衣の袖をまくって腕をむき出した。少年のころはお互いに強弓を競つたものだった。

「その年で未だ弓を引いておるようでは、ろくなことはない」

「やつれてはいるが信国。おぬしの面がまえ、変らんとぞ。以前の精悍さに不動心までが加わってきたようだ」

「おかげで信心は深まった」

「さて、その信心だが、興福寺にも念仏の別所を設けようという話を持ち上がったな。若い衆徒や雑人ばらの間でだいぶ念仏信者がふえてきた」

「それは結構な話だ」

「信国よ。おぬしは昔も南都で維那をつとめたほどの美声だ。こんどの念仏別所では大いに引声念仏をやりたいと思う。ひとつ興福寺へ帰ってきてくれぬか」

住蓮はことさらにさりげなく言った。

「帰るも何も、ここからどうして出る？」

「容易いことよ。わしが口をきこう」

「その念仏別所だが、念仏を誤まらざる念仏か」

「……」

一瞬宗源は住蓮の言葉の意味が判読できなかったらしく、ぼんやりと相手の顔を眺めていた。

すでに元久二年（一二〇五）の九月興福寺は九ヶ条の「奏状」をかかげて院に専修念仏の禁断を訴え出た。その九ヶ条のなかに「念仏ヲ誤マルノ失」というのがあった。

称名念仏だけを主唱して「心念」——繫念と観念の念仏をきびしく否定する法然義は誤まりだ、と訴えたのである。

住蓮が皮肉ったのは、その念仏別所が「称念」と「心念」の両方をふくんでいるとか、ということであった。

ようやく気づいた宗源は、

「信国、そこは方便と申すものだ。ここは一つ妥協してな、観念の念仏も理解してやって欲しい」

「そうはいかな、わが師法然は、観念ノ念ニモ非ズ、と明言しておられる。わしとしては捨てねばならぬ」

「法然ご房はたしかに立派な仏者じゃ。しかしな」

「しかし、何だな」

住蓮の胸で鮮烈な闘志が湧いた。

「古い。古すぎる」

「古いとな」

「そうだ。たしかに保元、平治から源平争乱という戦乱期にあっては、信心も一点に絞らねば救われがなかった。救いの綱が何本にも見えてきて、選ぶのに迷った。そんなときは一本の荒縄だけが効果的だ。つまり法然ご房の専修念仏はその荒縄よ」

「それで現在にはもう救いを必要としなくなったと言うのかな、宗源」

「救いを求める側が多種多様になった。平和がよみがえったからな」

この宗源、背後に相当な指導者がいるな、と住蓮は見抜いた。こんな巧緻な論理を駆使できる男ではないのである。

「平和だから、さまざまな念仏が必要だと申すか」

「人それぞれに機根があるろう。観念の念仏も欲しいし、称名念仏も必要となる」

「しかし、救われる道は一本ぞ」

「いや、その救われ方が問題じゃ」

「宗源、いやさ田淵の大僧都どの。いま平和がよみがえったと言ったが、ほんとうに戦乱は終わったのかな」

「どこで合戦をしている？」

「現実には干戈をまじえる場面は少いだらう。だが京と鎌倉の対立。南都北嶺のいがみ合い。野盗や強殺人の横行。現におぬしら、興福寺衆徒にしても何かと言えば都へ押しこんでくるではないか」

「……」

「先ごろ清水寺別所の争奪で大挙して来襲したが、話合いが成立して戦乱には至らなかった。ところがどうだ。手待ち無沙汰になった衆徒や雑人ばらは、引揚げぎわに四条から七条へかけて民家へ押し入った。片っ端から掠奪だ。女どもに暴行する」

「近ごろの僧綱は力量不足でう。輩下をおさえきれん」

「そんなことはおぬしら内部の問題だ。家をこわされ、娘や女房を奪われた民草はどうしたらいい。何で救われるのか」

「……」

「観念でも称名でも繫念でも、好きな念仏を選べか。何本もある細い縄を投げ与え、どれかを引くがいい。うまくいけば的中するぞ。クジ引きの救いではないか」

「おぬしもやっぱり古いぞ、信国」

「救われるのは荒縄一本だけだ。念仏なら専修しかないのだ」

「もはや法然の時代は過ぎ去った。信国よ、おぬしこそ新しい時代の救い手になれる」

「法然ご房を離れて、この住蓮の存在はないわ。阿弥陀仏を離れて念仏者が実在し得ないようにな」

「どうしても気持を変えないか、信国」

「信国はもうよしてくれ。わしは法然の弟子住蓮だ。宗源、未だ此処にとどまっていたいのなら、わしと一緒に声高々と念仏を唱えよ」

住蓮は立ち上がると合掌し、朗々と念仏をしはじめた。あわてて駆けつけた獄吏たちが住蓮を獄房の方へ引きずっていった。

興福寺の宗源は、そんな昔仲間を憐れむように眺めやうた。

(つづく)

待望の本格〈仏教〉歴史巨篇・毎日新聞社から刊行

《本誌連載中の大長篇歴史小説》

念仏ひじり三国志

—法然をめぐる人々—

寺内大吉 著

現代によみがえる法然の時代—

直木賞作家が十年の歳月をかけて遂に完成

した法然像—

僧俗を問わず現代人必読の書!!

四六判・上製 全五巻

第一巻三六八ページ 予価二三〇〇円

十一月下旬発売

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十八巻 十一月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十七年十月二十五日 印刷
昭和五十七年十一月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讀仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

昭和58年度版

浄土宝暦

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

◎法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和58年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な権信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 40ページ

1部単価 60円 (200部以上 55円)

送料実費 (400部以上はサービスします)

●なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであら
かじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

..... お申込み

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会

(振替) 東京 8-82187